

58期リレーエッセイ

厳しさとやりがいと

会員
大濱 正裕



■ ■ ■ ■ ■ 弁護士になって

私が1年半の司法修習を終えて東京弁護士会に弁護士登録をしてから早くも半年以上経過しました。私が弁護士になった当初は、司法修習と実務のあまりの違いに驚きを隠せず、毎日毎日がとても刺激的で新鮮なものでした。司法修習生は、あくまで事件の当事者ではないため、事件に関して何らの責任も負わないことから、精神的な負担を強いられることはほとんどありませんでしたが、その司法修習生がひとたび司法研修所を卒業して弁護士となった途端に、突然周りの人達から「先生」と呼ばれるようになり、一人の法律家として責任ある言動が要求されるようになるのです。当初はこのギャップには本当にとまどいましたし、本当に自分が法律家になっていいのだろうかなどという焦りや違和感を隠しきれませんでした。しかし、半年経過した現在ではようやく仕事の流れもつかむことができ、腰を据えて一つ一つの事件に取り組んでいます。

■ ■ ■ ■ ■ 弁護士業の厳しさ

弁護士業の厳しさは、新人といえども、特に依頼者からは一人のプロの法律家として扱われることです。これは、とても嬉しいことでもあります。逆に大いにプレッシャーを感じることもあります。今まで、社会人経験もなく、社会的に責任を負う仕事をしたことがなかった私にとって、このプレッシャーはひときわ大きく感じました。依頼者は我々が弁護士であるというだけで、何でも知っている、というような期待を抱いていることがあり、そのような期待に可能な限り応えることができるよう、日々の努力が大事であることを痛感しています。

日々仕事をしていくうえで、同じ事務所の先輩弁護

士の仕事振りや、知識の豊富さを知るたびに、自分は5年後10年後、先輩達のような一人前の弁護士になっているのだろうか、と不安になることも多々あります。しかし、我々新人弁護士も、精一杯努力して厳しい司法試験を突破し、司法研修所も無事卒業して現在弁護士となっているわけですから、これから貪欲に知識を吸収すべく日々努力すれば、きっと先輩方のような一人前の弁護士になれるものと信じて日々頑張っています。

■ ■ ■ ■ ■ 弁護士業のやりがい

弁護士になって、本当によかったな、と思う瞬間があります。それは、やはり依頼者に心からの御礼をしていただけた瞬間です。私が弁護士になってまだ半年程度ではありますが、こんな私なりに精一杯の事件処理をした結果、依頼者の意に沿う結果が得られ、依頼者から本当に感謝されたことがあります。

弁護士業は、依頼者の一生を左右するものであるがゆえに、弁護士にとっては大きなプレッシャーとなることもあります。逆に、その事件処理をうまく行なうことによって、依頼者の人生をより良くしていくことができるのであり、そういった依頼者の人生を背負うという意味ではとてもやりがいのある仕事であると思っています。

■ ■ ■ ■ ■ 今後の目標

前述のように、弁護士は依頼者の人生を左右する大事な仕事を任される職業です。私は、このような弁護士業の厳しさややりがいを胸に刻んで、日々精進し、依頼者の方々に安心感を与え、また、依頼者の方々やこれから先現れるであろう後輩弁護士達から尊敬されるような一人前の弁護士になりたいと思っています。